

は、ひとえに母の大きな力のお陰だったと深く感謝している。また、その母や私たちを助けて下さった多くの方々のご恩も、決して忘れてはならない。父は満州建国の理想を胸に身を挺して働き、満州国の終焉とときを同じくしてその一生を終えた。

戦後六十年、戦争によって多くの人が受けた苦しい体験、大切な人との悲しい別れ、心の傷は今も消えない。戦争では、私たち引揚者だけでなく戦地で戦った兵士の方々、本土空襲、原子爆弾、沖繩戦と、多くの人々が貴い犠牲となり、また他国へも多大な迷惑をかけた。「戦争はいやだ」とだれもが思っているはずなのに、今もなお、この地上のどこかで戦火が絶えない。

父をはじめ、平和の礎となった多くの犠牲者の鎮魂と、一日も早くこの地上に真の平和が訪れる日を祈りつつ、この私の引揚記を書いた。

の朝に大連港に降り立ち、満州大陸への第一歩を踏み出した。

二 父の移動に伴って

当時、日本の国策により昭和七年に満州国が建国されて理想の国づくりを目標にして、「五族協和」「王道楽土」というスローガンのもとに満州国建設の大事業が始まっていて、多くの日本人が「満州へ、満州へ」と渡っていた。その中心的な役割を担っていたのが撫順炭鉱や鞍山製鉄所であり、大連港湾設備であった。そしてそれらの拡充に欠くことができないのが輸送業務で満州国内で独占的な立場にあった満鉄は発展に発展を続けていて、日本内地から鉄道関係職員が次々と派遣されてきて、鉄道路線も急速に拡張し、奥地・辺地にも路線が延びていった。

それに伴って、社員としてその家族の異動も頻繁となり、父の満鉄派遣もその一端であった。

当時五歳になっていた私は、四平街駅の外れにあった満鉄社宅に住んだが、そのころの思い出と

私の歩んだ満州からの引揚げ

佐賀県 田中 晃

一 私の生い立ちと渡満

私は昭和五（一九三〇）年四月十二日に新潟県新津市片町の鉄道官舎で第一声を発した。

当時父は、鉄道省（現在のJR）の新津車掌所の助役の職にあつて、両親、兄、姉、私の五人暮らしの鉄道一家であった。私がこの世に生を感じたのは、官舎の横を走る列車の響であった。それからの私は、レールを走る列車の汽笛の音と、もくもくと吐き出されて辺り一面に漂う煤煙とを友だちにして育っていった。昭和十年の年が明けてすぐに、父は新津車掌区から南満州鉄道株式会社（満鉄）に派遣されることとなり、満州国の四平街という所に家族全員を連れて移った。これが渡満の経緯である。

九州門司港から大阪商船の客船に乗り、三日目

して夜勤をしている父に、母が心を込めて作った弁当を姉と二人で駅まで届けに行ったことを、今でも鮮明に覚えている。

四平街には二年ほど住んでいたが、父が列車区の助役になり、関東州の大連に近い奉天省の瓦房店という街の駅の鉄道社宅に転居した。父は列車車掌の勤務を管理する仕事で忙しそうだった。

街は新市街と旧市街にはつきりと分けられていた。新市街は日本人居住区で旧市街が現地人居住区となっていた。新市街には日本人の経営する飲食店や商店が立ち並んでいて、日本人専用で現地人は一步も入れなかったようだった。

八歳になった私は、瓦房店の日本人尋常小学校に入学することとなった。入学式には母に付き添われて喜々として校門をくぐったことを覚えていいる。校舎は煉瓦造りの立派な建物で、全校生徒は九十人ぐらいの小じんまりとした小学校だったが、在校生徒のほとんどは満鉄社員の子弟で占められていた。

瓦房店小学校に通って一年が過ぎたころ、再び父の転勤で一家は移動した。今度は北満の中心都市ハルビンと東満の主要都市牡丹江との中間に位置する一面坡イェンパという街にある鉄道社宅であった。

この地一帯は、旧帝政ロシア時代に建設された街で、白亜の教会の尖塔に輝く十字架が美しく目に映える丘に囲まれていた。市街地の建物も、帝政ロシア時代に建てられた建物がまだ多く残っていて、ロシア風の造りでその周囲には白樺林が至る所に見られる白く美しい落ち着いた街並みであった。住民も白系ロシア人が大勢暮らしていて、市街地から離れた場所に集団農場を営んでいた。日曜日になると街中のロシア教会に集まって、ミサを捧げ、賛美歌を唱えて敬虔な祈りをしていたのを見た。その美しいハーモニーがまだ耳の奥に残っている。私たち家族の住んだ鉄道社宅もロシア風の建築様式で、今まで見慣れた建物とは異なり何となく遠い異国の地に来たという気持ちにさせられた。トイレ・洗面所、それに浴槽が一つの

に移った。

中国人と韓国人を合わせて八十人ぐらいの人数か住んでいない町というより、村落といった方が合っているような所だが、近くには日本軍の飛行場があつて二百人ぐらいの航空部隊の兵士が駐屯していた。昼夜を分かたぬ猛訓練が行われていて、付近一帯は爆音が響きわたる軍事上の重要な拠点基地であった。

私の通う小学校は海浪にはないので、一つ隣の牡丹江市の小学校に転入することとなり、汽車通学になった。朝早いのはつらかったが、汽車通学はそれなりに楽しいものだった。

通学した学校は、牡丹江市圓明尋常高等小学校で全校生徒は約五百人で、赤煉瓦造りの二階建ての立派な校舎で授業を受けることとなった。

当時、牡丹江は交通、経済、軍事などのあらゆる面において満州国における重要な拠点で、数年の間に飛躍的に発展した新興都市で、特に日本軍の軍都とまで言われていて、多くの部隊が周辺に

部屋に集約されていて、その間には何にも間仕切りがなく丸見えとなっていたことには驚いたし、困ったものだった。

この駅には、機関庫があつて十両ぐらいの機関車が常時出入りしていた。この機関車を運転する機関士は日本人社員は少なく、大部分は白系ロシア人の機関士だった。勤務が終わって機関庫に戻つて来ると、白系ロシア人家族が一家総出で迎える風景は今でも記憶に残っているが、微笑ましいものだった。白系ロシア人が多いので、列車の乗降客も当然に白系ロシア人が主であつて、それを満鉄も利用していたようだった。

私は一面坡の小学校二年生の勉強をしたが、クラスは二学年の複式授業で生徒の中には白系ロシア人の児童もいたが、日本語もどうにか通じた。全体に白系ロシア人の子供は礼儀正しかった。

一面坡での生活はわずか一年ほどで、またまた転勤となった父は、海浪アイロフという小さな町の駅に駅長として着任したので、一家はそれに伴つて海浪

駐屯していた。日曜日になると多数の兵隊が外出し、市街地はカーキ色で埋まるぐらいだった。それに伴つて、商店を営む日本人も多く生活していた。さらに牡丹江周辺には開拓団も多く入植していて、満蒙開拓事業に精励しているなど、行政上、産業上からも満州屈指の重要な都市であつた。

圓明小学校で三年生、四年生の二学年を過ごしたが、また転校ということになった。

今度は図佳線トカの拠点で、北満の重要都市である佳木斯市から牡丹江に向かって三つ目の、弥栄という駅であつた。当初は、駅長となった父だけが単身赴任ということになったが、父からの情報によれば、弥栄には大きい開拓団があつて、日本人小学校も開設されているということなので、母と私とが駅長社宅に移ることにした。社宅は煉瓦造りの二戸建てで、隣には保線区助役の中村さん一家が入居されていた。建物はしっかりしていたが、電気が引かれていないことと水道がないことには驚き、北満の地はまだまだ大変だということを実

感した。夜は石油ランプなので、手元だけが明るく室内全体は薄暗く、勉強にも不自由をした。水は毎日、水瓶と浴槽に現地人を雇って運んだが、今までに経験したこともない原始的な生活で、何かと戸惑うことが多かった。

弥栄という所は、昭和七年に日本から満蒙開拓のために、第一次武装移民団が送り込まれた所で、言わば満蒙開拓発祥の地である。団組織は日本の村役場方式が採られて弥栄村と命名され、村役場、農業協同組合、農産加工場（味噌、醤油の醸造）、牛乳処理所、製材工場などで構成されていて、一応自給自足体制が整っており、約千五百余人の開拓村民が、各部落に分かれて開拓に従事していた。

私は父に連れられて弥栄国民学校を訪れた。職員室で大室校長先生をはじめ在室の諸先生に挨拶をしたあとに、担当となった吉田治蔵先生に伴われて教室に行き、みんなに紹介された。この学校では上級の三学年が一緒の教室で勉強する複式学級制をとっていて、午前四時間は学科で、午後二

時間は農作業の実習となっていた。こんな時間割は初めてで、特に農作業は肉体労働で骨身にこたえた。

生徒はほとんどが開拓団関係者の子弟で、学校周辺の者は通学していたが、学校から離れた「屯」（各部落のことをこのように呼んでいた）の生徒は、月曜日から金曜日までは併設の寄宿舎で生活をして、週末の土曜日になると家からの迎えの馬車でそれぞれの家に帰っていた。私は、土曜日に家族に迎えられて喜んで帰って行く生徒を見て羨ましく思ったものだ。というのは、五年生の間は鉄道社宅から通学していたが、六年生の二学期の初めに、また父が転勤になり、父と母は牡丹江鉄道局の社宅に引っ越した。私は既に牡丹江中学に進学する決心をしていたので、学年途中からの転校を避けて弥栄国民学校から受験する考えで、父母と離れて寄宿舎生活することになった。寄宿舎は、男子生徒と女子生徒とは別々の部屋に別れていて、それぞれにトイレ・浴室・舎監室があつ

た。食事は、炊事場で吉田先生の奥さんと中国人夫婦で調理したものが給食された。食事は、男女全員が先生たちと一緒にしていたと記憶している。

当時、弥栄駅から牡丹江駅へは約八時間ぐらいかかったので、週末に父母の元に帰ることはできず、週末になると寂しくなっていて、吉田先生家族と寄宿舎で過ごしていたが、今では懐かしい思い出である。

二学期、三学期は中学受験に備えての猛勉強の毎日だった。弥栄国民学校から上級校に進学するのは、私と校長の娘の工藤範子の二人で、毎日面接テストのリハーサルが吉田先生によって行われた。入学試験は牡丹江中学校であったが、第一次試験が体力テスト、第二次試験が面接テストだった。私はどうにか合格したが、これも吉田先生の懸命なご指導の賜で、牡丹江の社宅までお祝いに来て下さったことと合わせて、改めて心からの感謝を捧げる気持ちでいっぱいである。合格後、入学するまでは牡丹江にいてもよいとのことだった

ので、弥栄国民学校の卒業式に出席しなかったことを今更のように悔やまれてしかたがない。かくして私は昭和十八年四月、晴れて牡丹江中学校一年一組に入学し、牡丹江市西聖林街の満鉄社宅から通学することとなった。毎朝、隣保班別に集合し二列縦隊になって、軍歌を歌いながらの登校だった。一、二学年を過ごし第三学年になると、太平洋戦争も末期症状を呈し、同級生からも続々と軍関係に出て行く者が増え、さらに学徒動員が活発となり、下級生のみが在校している有様になった。

三 ソ連の戦争介入

第三学年になると生徒は、兵器生産か、食糧増産かのどちらかに従事するかを選択しなければならなかった。私は近隣の開拓団での食糧増産の道を選んだ。開拓団では各農家に配分されて、一カ月間の泊りがけの労働だった。今まで見たことも、もちろん手にしたこともない農器具の数々、そして牛や馬などの家畜の世話、それらを使って遠く

地平線まで続く広大な畑に向かつて苦闘する毎日となった。その苦闘生活もようやく終わった八月七日、私たちは開拓団の皆さんから「また来年もお願いしますね!」との言葉に送られて、久しぶりに牡丹江の家に向かった。

牡丹江の駅に着いたが、構内が何やら慌ただしかった。周りの人に聞くと「非常事態が起きたらしい」とか「満ソ国境で異変が生じたらしい」という話だったが、はっきりしたことは分からなかった。学校からは「明日学校に登校せよ」という指示を受けて、一路家に戻った。夕食を済ませ夜空が暗くなったころ、多分七時だったと思うが、突如として旧市街の方向で「ドーン」という爆発音が轟き、次いで夜空に爆音が響きわたったが、詳しいことは分からず不安な一夜を過ごした。翌日登校すると、先生から「満ソ国境にソ連軍が接近中で、これに対して関東軍が応戦中である」という意味の話があり、授業は午前中で打ち切れ、午後に再び登校せよとの指示で一時帰宅した。

つた返していたが、皆一様に不安な様子を隠しきれずに、これからのことを話し合っていた。日本が戦争に負けるとは考えもしなかったし、これほど戦局が悪化していることも知らなかった人がほとんどだったろう。さらに、この避難時に再び牡丹江に戻ることはないと思った人も、ほとんどいなかったと思う。

鉄道局の係員の誘導により、客車に乗車してほつと安堵していたときに、牡丹江中学の教員が「牡丹江中学の生徒は直ちに下車して学校に集合せよ!」と叫び回っている声が車窓から聞こえた。私はちゅうちょして、下車した方が良いかどうかと迷い母の顔を見た。すると、母は悲しそうな顔をして「このまま乗って行って!」と言ったので、私は身をかめ見つかからないようにして早く発車することのみを願っていた。

列車は、午後八時ごろになってようやく発車し、一路ハルビンに向かうという説明があった。今日一日の激しい動きで疲れが出て、うとうととしてい

帰宅途中で突然に空襲警報が鳴り、慌てて近くに退避した。空を見上げると遙かに銀色の光るものが見えたと思ったら、見る見るうちに近くなった。赤色の星のマークがはつきりと分かり、三十機編隊のソ連軍機であった。編隊は悠々と牡丹江市街上空を旋回していたが、間もなく旧市街の方向からもくもくと黒煙が上がってきた。

急いで家に戻り、午後の登校の支度をしていると、鉄道局から緊急連絡が入った。その概要は「牡丹江市が戦場になる危険があるので一時退去して、戦火が収まったら再び戻る。そのために午後七時に機関区引込線から避難列車が出るので、満鉄職員家族は緊急物資を携行してその列車に乗車せよ」とのことであった。時計を見ると、あと三時間しかないので慌ただしく準備をした。その日は忘れもしない昭和二十年八月九日であった。

母と私はリュックサックに着替えて二、三日分の食糧と、わずかなお金を持ち、戸締まりをして引込線にと急いだ。引込線では乗車する家族でご

るうちに明け方になり、三棵樹サンカジュに停車した。一時間ぐらい停まって再び動き出したが、ここでの説明は二、三日後にはハルビンにもソ連軍が侵入するので、さらに南下して安全な街を探すということだった。列車はひたすら走り続けて梅花口バイカコウという駅に着き、そこですぐに機関車は列車から切り離されて、元の機関区に向かって去って行った。

しばらくすると隣のホームに貨物列車が到着したが、それには大勢の関東軍兵士が乗っていた。話を聞くと「我々はこれからどこに行くのか分からない」と言ったが、その列車は私たちより先に発車して行った。これからソ連軍と戦闘を交えるのだと思つて、武運を祈った。あとになって分かったことだが、兵士たちは新京から通化に向かつて避難中だったようだ。関東軍の反攻と思ひ込んでいたのに待避だったと知り、悔しい思いをしたことを覚えている。

私たちの列車には、いつまで経っても機関車が来ない。係員の説明では「運転する機関士がこれ

から先は行かないと言っているので、お金を握らせるほかない。一家族五円ずつの援助を願いたい！」ということだった。やむを得ずお金を調達して渡すと、なんと現金なもので、一時間ぐらいすると石炭を満載した機関車がきた。お金の力を借りてこの難関をようやく乗り切って、梅花口をあとにした列車は、途中停まることなく一路次の目的地となった吉林に向かって走り続けた。

翌朝、吉林駅に着いて受け入れ施設の折衝をしたが、見つからなかった。このままここで野宿することもできず、次の目的であった撫順に向かうという係員の説明があった。列車は途中で停まることもなく、午後三時ごろに東洋第一の石炭産出を誇っていた撫順炭田のある撫順駅に到着した。係員の指示で下車し、そこから郊外電車で三十分ぐらい乗り炭鉱青年寮に案内された。寮では先住者である青年隊の人たちが、私たちを収容するために移動して部屋を空けてくれたことだった。本当に嬉しい心遣いに感謝したものです。各班こ

にも襲ってくるかもしれないという情報も伝わり、男子は自警団を組織して婦女子や自己の安全を守ることとなった。牡丹江中学の生徒も、自警団の一員に加わった。

自警団は、青年寮の玄関横を詰所として交替で詰め、警戒態勢をとって暴徒の来襲に備えた。この騒ぎのため、八月十五日の重大放送を聴くことができなかった。

翌日十六日に初めて敗戦の事実を知らされ、神国日本が敗れたということが間違いない事実であることに、大変な衝撃を受けたものだった。八月十六日の夜から周囲の状況が一変してきた。従来見慣れていた、日本軍の戦車とは違う戦車を先頭にしたトラック部隊が、次々に進入してきた。明らかにそれはソ連軍だった。この光景を見て、本当に日本は負けたのだということを実感すると共に、悔し涙があふれてきた。

それから五、六日経って、父が私たちのいる青年寮にたどり着いた。八月十日に佳木斯の満鉄社

とに部屋割りを受けて、四十畳敷ぐらいの畳の間に二十人が割り振られ、八月九日に牡丹江を発ってから初めて手足を楽々と伸ばして横になった。

その夜は、久しぶりに心行くまでぐっすりと眠ることができた。定かには分からないが、その日は多分八月十三日の夕方まで五日目であった。翌日からの食事は、一日朝夕二回の炊き出しで賄われた。各班から炊事要員を出して握り飯を造り、おかずは漬物だけという質素な献立であった。

そのような生活を送っているうちに、どこからともなく「日本は戦争に負けたらしい！」というショッキングなうわさが流れてきたが、私たちは「神国日本が戦争に敗れるはずはない」と思っ取り上げなかったが、しかし撫順市街の治安が乱れているという情報も耳に入ってきた。それは、現地民が三三五五と集団を組んで日本人住宅を襲い、破壊しては物品を強奪しているとか、日本人を見ると襲っては殴る、蹴るといった暴行を加えているとかという話だった。私たちの住む青年寮

員家族を連れて避難列車で出発したが、途中方々に停まりながらようやく撫順に着いたとのことだった。ただ、姉だけがどうなっているのか分からずに、案ずるばかりだった。

姉は、牡丹江放送局に勤めていたが、八月九日に私たち家族が避難をする際には、一人放送局に残ると言ったがそのまま音沙汰がなく、敗戦となった今では果たして無事かどうか知る術もなかった。だが、幸いにもその姉も二週間後には私たちを探しあてて、やっと巡り会うことができた。

姉は、八月十日に一般邦人の人たちと避難列車で中部満州の鉄嶺まで避難し、そこでしばらく収容所生活を送り、私たち家族の避難先を尋ね探していたが、一人で奉天（瀋陽）を経由して撫順までやって来たということだった。

こうして、やっつこのことで親子四人が無事に再会を果たし、一カ月ばかりの間一緒に生活できた。しかし、撫順市街の治安は日本の敗戦を境にして現地民による住居不法侵入、集団での略奪、暴行

が激しくなつて、日本人自警団との間にも激しい攻防があつて危険な情勢となつていたが、幸いにもそれまでは死傷者はなく、ときの推移を見守るだけだった。

八月十八日にはソ連軍による軍政が敷かれたので、ようやく現地人による略奪、暴行の騒ぎも鎮静化してきたが、今度は市内にあふれだしたソ連兵による略奪や、日本女性に対する暴行が頻発した。暴行現場で、日本女性を助けようとした男性がソ連兵によって射殺されるという事件が、至る所で発生した。そのため婦女子は自己防衛のため髪を切って丸坊主となり男物の服を着て、顔には墨や煤を塗つて男装をしていた。

聞いたところによると、ソ連軍は対ドイツ軍との戦いに大量の戦力を投入していたために、満州国に侵攻するには兵力が不足していたので、急遽シベリア地区の刑務所で服役していた囚人を兵隊に仕立てて侵攻した急造の軍隊だったとのこと。将校や下士官は正規の軍歴を有していたが、兵隊

男性は関東軍による根こそぎ召集によって不在となり、婦女子と老人だけの避難行で、着ている物はぼろぼろ、食べ物はなく、ごみ箱を漁りながら歩いていった。栄養失調で、幼い子供からばたばたと死んでいった。

市内の各日本人小学校はそれらの避難民の収容所にあてられていたが、十月ごろからは凍死した遺体が校庭に積み重ねられるようになり、それが野犬などによって食い散らされる光景は、無残極まりないものだった。

私は「銀蝶」の使用人だった中国人が経営する市場内の店で、店員として日本人相手の商売をすることになり、朝八時に出勤して午後六時に家に帰るといふ日課だった。中国語も何とか話せたので、主人の張さんの言うことはおおそ理解できた。

市場には約八十軒の煉瓦造りの店が建ち並んでいて、今までの日本人に代わつて中国人が営んでいた。食料品店、雑貨屋、魚屋、肉屋、食堂など

は知性もない悪質な者が多かった。

たまたま父の小学校時代の友人が、市内で割烹料理店を営んでいることを知ったので、訪ねたら「こんなに不穩の折だから、是非一緒に住んでくれないか？」という話になり、私たちは寮を出て市内の江頭さんの家に厄介になることとした。家は二階建ての大きな建物で、帳場や調理場のほかに小部屋が幾つもあり、従業員も多数抱えた立派な料理屋であった。確か「銀蝶」という屋号だったと記憶している。

私たちは、二階の十畳間一室を借りて生活を始めた。食事は韓国人の板前が作つてくれるので、食べる事には何の不自由もなかった。父の幼な友達だったというだけで、食べる事の大変な時期に世話を下さつた温情に、日本人の絆をつくづくと感じた。

撫順市には、満州の奥地から続々と日本人避難民が集まつてきたが、その中でも特に開拓団の人たちの悲惨さは目を覆うばかりであった。聞けば、

何でもあり日本人が買い物をしていった。廊下にはおはぎ屋、餅屋、飲み屋の屋台が並んでいたが、ここは日本人が中国人に場所代を払つて商売をしていた。

撫順には戦前から東洋一と言われる露天掘りの炭田があつたが、ソ連軍の軍政下になつて再び大規模な採炭が開始されて、在留日本人男子で健康な者はほとんど「留用」という名目で石炭掘りに狩り出されていた。一日十円の軍票による手当てで毎日重労働を強いられたが、食べるためにはこれもまたやむを得ない事だった。

掘り出した石炭は、貨物列車でソ連本国に運び出されていた。炭鉱設備や、火力発電所の機械もここで必要な物以外は全部解体され、ソ連本国に持つていったが、その解体作業も強制的に徴用して集めた日本人が主力だった。ソ連兵は毎日午後三時ごろになると、自動小銃を構えながら市場に集まる日本人を狙つて威嚇して、次々とトラックに乗せ、二、三百人が発電所工事の現場に送られ

て夜間労働を強いて、翌朝わずかなパンとバターそれに煙草を支給して帰すという理不尽なことをしていた。

四 正規軍と八路軍の戦い

ソ連軍の軍政下にあった撫順市は、昭和二十一年三月になって、ソ連軍の本国引揚げに代わって中国共産軍（八路軍）の管理下になった。八路軍は地元の中国人を徴用して組織した即成の軍隊で、武器は日本軍の武装解除した火器と、ソ連軍が残っていた車両などの寄せ集めだった。兵士の中には、生きんがために日本人も入隊していた。

そのうちに、中国本土から蒋介石の率いる正規軍が南方から満州に進出して、奉天を制圧し撫順に向かって来た。撫順市内では正規軍と共産軍との戦場になるとの情報流れ騒然となり、住民は家々の窓には板戸を打ち付けて外出もしなくなっていた。

正規軍が撫順市内に進入して来たのは四月中旬の夜半だった。民族服姿の便衣隊が前衛隊となっ

てひそかに市内に潜入し、八路軍の要衝をことごとく破壊してしまった。正規軍は、すべてアメリカ軍の武器と車両で装備されていて、続々と進入して来た。八路軍はたまたらずにハルビン方面に撤退してしまい、撫順市内は正規軍に制圧された。内戦状態において一時は劣勢だった正規軍も、アメリカ軍の強力な支援を受けて反撃に転じ、満州の主要な都市部は正規軍の管理下になったのこのだった。ジープやトラックなどの車両は、すべてがアメリカ製のGMCと言われるメーカーの物で、軍の中には車両運転の指導に任ずるアメリカ兵の姿も見られた。こうして撫順市内は平静を取り戻した。

五 引揚げの開始

昭和二十一年七月になって、中国軍政部から日本人居留民団に対し、日本人の本国への送還を開始するという通告があった。私たち日本人は、敗戦によってすべて日本内地に引揚げることになり、無一物の身になって住み慣れた満州の地から去ら

なければならなくなった。もう、ここには私たちが夢に求めた安住の地は無くなってしまった。それでも待ちに待っていた祖国への引揚げには言い様の無い嬉しさが込み上げてくるのでした。

引揚げの順序は、満州奥地からの避難民を優先し、撫順市の在住者は後回しにすることとなった。私たち家族四人は、七月十五日に撫順を出発することになったが、「銀蝶」の江頭さん一家は私たちよりもあとに引揚げることになった。引揚げに際して待ち帰ることのできる物は、現金が一人千円と身の回りの品で、貴金属類は一切駄目という指示だった。

十五日午前十時、指定された小学校に集合して各班の編成が行われ、一日三百人ずつ日本へ向かう第一歩を踏み出した。中国人の係官による所持品検査を受けて、各大隊ごとに撫順駅に向かった。駅の貨物ホームには、既に引揚列車が待機していたが、それは客車ではなく普通、車両などを積む柵の無い台車が十五両連結されていた。雨が降れ

ば、頭からびしょ濡れになることは間違いないことだった。十四時に各班ごとに車両が割当てられ、私たちは前から五両目に乗り込んだ。十五時に機関車が連結され、十六時発車となった。

これで撫順とも永遠の別れだが、見送る人も無く、物見高い中国人だけが私たちの方を見ていた。列車は徐々に速度を増し撫順市街はだんだんと小さくなっていった。これから三日間の汽車の旅で、奉天、錦県を経て葫蘆島コトウに向かうのである。途中での停車は、大きな駅だけと言われたが、停車すると暴徒が車内に乱入すること、最後尾車には正規軍の警備車両が連結されていた。途中で雨に遭ったが、大したことは無かった。だが、機関車から吐く煤煙で悩まされた。列車は何事も無く、予定どおり三日目の朝に錦県駅に到着した。しばらくして再び列車は動き十分ほどしてまた停車、そこで下車させられ、正規軍の兵士に引率されて鉄条網で囲まれた引揚者収容所に入った。ここで一時待機していて、葫蘆島の引揚船の割当て

を待つとの説明があり、アンペラの小屋に入れられた。

この収容所で二泊し、七月十九日の朝、いよいよ乗船することになり再び列車で葫蘆島に向かい、約四十分で港湾施設のある構内引込線に入った。岸壁には既に引揚船が五、六隻横付けされていた。私たちが乗船するのは、大阪商船の白龍丸という約四千三百トンの貨客船だった。歩くこと三十分で、夢にまで待ち侘びていた引揚船に乗船した。タラップを昇り、後甲板から船倉に入り、仕切りされた二階の部屋に入れられた。貨物を積む船倉を幾重にも仕切って、引揚者を収容するために改造されていた。前、後甲板の船縁には一度に五十人ぐらいが使用できる木造の仮説トイレがあった。乗船して二時間、白龍丸はゆっくりと岸壁を離れた。遂に満州大陸とも永遠のお別れとなった。

昭和十五年、六歳で父に連れられて渡満してから、小学生、中学生として満州各地を転々とした十二年間の満州生活の終わりである。過ぎ去った

かと思った。

その夜は上甲板で乗組員の主催する演芸会が開かれた。久々に聞く日本の歌や、ギターの爪弾きに心を癒され、同じ船に乗っていた宝塚歌劇団の全員が「ホーリーチンツアイライ（何時の日、君帰る）」を日本語と中国語で合唱したが、本当に私たちはいつまた満州に帰ることができるのであるうかと思ひながら、涙が込み上げてきた。三日目の朝、目が覚めると船は海岸線を航行していた。これが夢にまで見た日本の陸地なのかと思っていると、係員が「本船は午後三時に九州の博多港に入港する」と説明してくれた。海上では多くの漁船が漁をしていたが、私たちの船を見ると手を振って歓迎してくれた。

午後三時ごろになると前方に防波堤が見えはじめ、博多市街の遠望が開けてきた。船は港内に入りブイに係留されたが、博多湾内は引揚者を乗せた船で満ちていた。上陸の順番待ちのため二、三日停泊することだった。その間に船内で防疫

思い出が走馬灯のように巡り感傷に動かされて、港がだんだん遠く離れ遂に陸地が消えるまで、一人甲板に佇んで別れを惜しんだ。

船倉の中は、大勢の人の吐息でむんむんして蒸し暑いので、上甲板で寝ることにした。船内で牡丹江中学の友人と巡り会えたり、満鉄社宅の人々とも会えて、お互いの無事を喜び合った。

二日目の朝、乗船者の一人が死亡され、船内放送で「今から水葬に付すから、汽笛を合図に黙祷をして下さい」とのことが流された。早速に甲板に出てみると、遺体は白い布に包まれて戸板の上に安置されていた。船長をはじめ係の人々が整列している中を、遺体は静かに戸板から滑り落ちて海中に葬られた。同時に汽笛が「ポー」と悲哀を込めるように鳴り響き、船は右舷旋回から大きく円を画くように一周した。亡くなった人は、あと一步で祖国日本の土を踏むことができたのに、さぞかし無念だったことと思うと涙が出てくる。生きて祖国の土を踏める私たちは、何と幸いなこと

検査、入国手続きなどを済ませた。船は三日目の正午ごろに動き始め岸壁に向かった。錨が投げ込まれ、接岸した船からリュックサックを背にして、待ちに待った日本の土を踏んだ。夢にまで見ていた祖国の山河は美しかった。本当に長いような短いような一年七カ月の苦闘であった。

六 祖国日本の第一歩

上陸すると、アメリカ兵によってDDTの消毒散布を受けて頭から足まで体中真っ白にされ、次いで引揚援護局の係官によって所持品や所持金などの検査があつて、引揚証明書の交付を受けて引揚者収容所に入った。ここで引揚げのための編成が解かれ、大隊長から「本当に長い間、苦勞さまでした。これより本州方面に帰る方は港からの引揚列車で、九州の方は博多駅からの汽車を利用して故郷に帰って下さい」という挨拶があつた。

私たち親子四人は、ひとまず母の郷里である佐賀県の諸富町に向かうために、国鉄の博多駅まで歩くことにした。

博多の街は、空襲で無残なほどに破壊されていた。米軍の兵士とジープが街中を往来しているのだけが目に入り、「日本は戦争に負けた。本当に負けたのだ！」と実感させられた。博多駅に着いて駅員に尋ねると「今度の列車は十七時三十分発の佐世保行きで、諸富に行くには佐賀で乗り換えればよい」と教えられた。ホームはひどい混雑で、果たして予定の汽車に乗れるだろうかと心配になってきた。周囲の人々は私たちの姿を見て「満州からの引揚げですか？ 大変にご苦労さまでした！」とねぎらってくれた。やがて列車が入ってきたが、窓ガラスは無く板張りで、降りる人も乗る人も皆、窓から出入りしていた。私たちも周りの人たちの助けでどうにか車内に入ることができた。

発車のベルが鳴り汽車は動き出し、何となくほつとした。あとは佐賀まで黙っていても運んでくれるだろう。裸一貫、着の身着のままでの祖国への帰還、命があっただけでも何よりの幸せと思わ

ので、受験し採用された。昭和二十二年九月、十九歳で国鉄職員となることができた。元々父が国鉄マンだったので、鉄道に関する知識はある程度は持っていたし、鉄道関係で働くことは希望でもあったので、裸一貫から国鉄に身を呈する覚悟で、戦後の私の将来に向けての人生が発車となった。

平成四（一九九二）年、北海道釧路管内に、満州弥栄村の開拓団からの引揚者が集団入植していることを知り、早速に標茶町弥栄におられる小野塚芳一様にお便りをしたところ、全国の弥栄村関係者が、慰霊と親睦のために集まる「弥栄会」という会があることを教えられた。これが縁となって、平成五年に新潟県月岡温泉で開催された第二十一回弥栄会総会に参加し、五十年ぶりに懐かしい在満国民学校時代のクラスメートなどの再会を果たすことができた。小学校時代の写真も頂いて、幼いころの私の顔と再会し感激だった。これからも「弥栄会」への参加を楽しみに、老後を元気に過ごして行く積もりである。

なければならぬと思っているうちに、うとうととして寝入ってしまった。

母の実家に着いたのは午後八時を過ぎていたが、突然のことで母の兄の家族が総出で「よくぞ生き返ってくれた！」と涙を流して喜んでくれた。その夜は親族が集まり、夜通しで無事を喜んでくれた。

七 引揚げ後の暮らし

着の身着のままの引揚者である私たち親子四人は、当分母方のこの家でお世話になることとなった。空襲で焼けて新築中だったので、壁の竹網作りと泥壁塗りを加勢していたが、やがて落成を迎えるころ、父の姉から空き部屋があるということ佐賀市内に転居した。姉と私は市内のブリキ工場で働き、年齢制限で国鉄への復帰ができない父は、農家で卵を仕入れて街の飲食店に行商していた。母も下駄の行商で一家の生計を立てていた。

父の弟が国鉄の管理局の要職にいて、私に現地採用の制度があるから受験してみよと勧められた

八 結び

何百何十万の軍人や民間人が、かの大戦で犠牲になった。何物も得ることは無く、ただ残酷と悲惨の傷跡のみが残る戦争、再び繰り返すことの愚かしさ。だが、世界の中では今も戦火を交えている所がある。戦争がいかに無意味であるかを知っているのに、そして必ず大きな犠牲を払うことになるのにも思うとき、私たちは戦禍の忌まわしさと平和の尊さを次の世代に語り継ぐ使命があるのです。そして、私のように満州から祖国の土を踏み十二年間の苦闘を無駄にすることなく、戦争は人類の滅亡をもたらすことを戒めなければならない。